

2011年1月29日

ある経済学者の苦悩*

—理論とフィールドの間で—

正木響†

高校の時に習った物理学によると、一度力を加えて走りだした台車は、摩擦がない世界では永遠に走り続けるという。経済学理論にはさまざまなものがあるが、そのうち主流とされている近代経済学で描かれる世界も、ある種これに近いところがあるように思う。理論としては感動を覚えるほど完成されているものも少なくないが、しかし、かなり限定的な仮定の上で構築された世界であることは否めず、現実には、とりわけ途上国では、台車を逆走させかねない程の摩擦が存在するのが常である。しかし、だからといって、こうした経済理論を学ぶのは無駄かというところも、理論道義にはいかならない経済現象や経済アクターの行動の理由を考えることで、新たな知見が得られることも多い。実際、そうした理論と途上国で観察される経済社会の齟齬から新しい理論を見出してノーベル経済学賞を受賞した経済学者も少なくない。

かくいう私は、西アフリカ地域の経済を世界経済との関わりで研究している。自虐的に語るならば、特定地域の経済研究は、普遍化が可能な理論研究や特定分野の研究に比べて、経済学研究の中ではかなりステータスが低い。それにもかかわらず、地域経済の問題を真面目に考えれば考える程、政治、歴史、文化、宗教、慣習、地理、気候といった諸分野にも手を広げることを強られる。当然、すべての分野に深く通じることは不可能なので、薄く広い内容一下手をするとガイドブックのような類一に陥りかねない。「単に現実を追いかけて論文を書いているだけでないか」といった、王道を歩んでいる経済学者からの冷たい視線を感じることもある。私が敢えて「世界経済との関わりで」としているのも、ガイドブックに陥ることを避ける手段として「国際経済学の理論」や「世界経済論の視点」を支柱に据えるようにしているからである。具体的には、グローバル化という、モノ、ヒト、カネ、そしてこれまで非貿易財として捉えられていたサービスまでもが国境を越えて自由に移動するようになったこの新時代に、アフリカ大陸がどうやって経済発展していくのか？という問題関心の下、具体的な解決策の一つとして西アフリカの地域経済統合の動きに期待し、その成り立ち、通貨統合の進捗度や可能性、そのコスト・ベネフィットなどについて研究している。

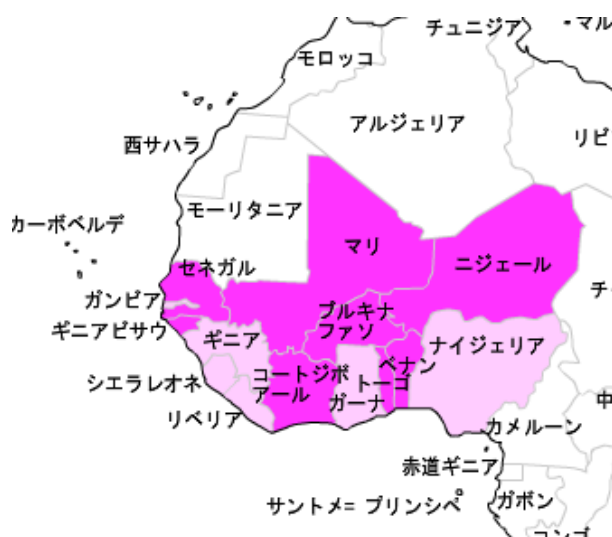
西アフリカには、西アフリカ諸国経済共同体 (Economic Community Of West African States, 以下 ECOWAS) という、1975年に設立された地域経済協力機構が存在する。こ

* ここでの経済学者とは、経済学のディシプリンを主たる分析メソッドに掲げる学徒を意味する。

† 金沢大学人間社会研究域経済学経営学系

‡ この点については、Leijonhufvud, A. (1973) "Life among the Econ", *Western Economic Journal*, 11(3) を参照。経済学者 (エコノ族) の世界が痛烈な皮肉を込めて描かれている。

の ECOWAS の加盟国 15 カ国のうち、8 カ国は、植民地時代に礎が形成された旧フランス領を中心とする UEMOA(西アフリカ経済通貨同盟、Union Economique Monétaire Ouest Africaine) を形成している。つまり、図 1 にみるように、ECOWAS の中に、すっぽりと内包される形でもう一つの地域経済協力機構 UEMOA が存在しているのである。このうち、表 1 に見るように、UEMOA は植民地時代にフランスから与えられた通貨 CFA フラン（植民地時代の正式名は、フランス植民地フラン Franc des Colonies Françaises d'Afrique。現在の正式名はアフリカ金融共同体フラン Franc de la Communauté Financière Africaine) を軸とした通貨統合を基点に、EU とは逆のルートを進む形で、経済共同体、関税同盟を実現している。これに対して、ECOWAS レベルでも、経済共同体の形成、通貨統合実現をめざしてさまざまな政策が打ち出されている。



注：色つきの部分が ECOWAS、このうち濃度が高い地域が UEMOA になる。

図 1 西アフリカの 2 つの地域経済統合

表 1 西アフリカの経済通貨同盟の到達度 (2010 年末)

	UEMOA	ECOWAS
自由貿易圏	○	○
関税同盟	○	2009 年合意、2010 年に開始
共同市場	資本○、ヒト△	資本△、ヒト△
経済同盟	○	×
通貨統合	○	×

筆者作成

ECOWAS レベルで経済通貨統合が期待される理由は以下の 4 点である。まず一つ目は、図 1 に見るように、非 UEMOA 国が、UEMOA にバラバラに食い込んでいることがある。

これは、宗主国が植民地化にあたって、それぞれがおさえた河川を基点としながら支配地を拡大していったことに端を発する。仮に、CFA フラン圏に囲まれたガーナやガンビアが周囲と同じ経済通貨同盟を形成すれば、周辺国との取引に際して煩雑な手続きをとることを強いられていたこれらの地域の域内取引をより活発化する可能性もある。二つ目は、西アフリカの内陸国はすべて UEMOA に加盟しているが、非 UEMOA 国がこれらの国と国境を接していることがある。かつては、これら内陸国はコートジボワール、トーゴ、セネガルといった同じ UEMOA 諸国を経由して取引をする傾向にあった。しかし、コートジボワールは 21 世紀に入って以降、政治がかなり不安定な状態にある。民主化の面で問題視され、援助が滞っているトーゴのインフラ、特に内陸へ繋がる道路もかなり老朽化している。これに対して、衛星と GPS、IT ネットワークを駆使して、内陸国への保税運送システムを構築することに成功したガーナを経由して取引するケースが近年増えている。この場合、ガーナと内陸国は、現在のところ、異なる経済制度に立脚するため、より煩雑な手続きが必要とされている。三つ目は、ナイジェリア以外の国の経済規模が極めて小さいことである。15 カ国中、1000 万人以下の人口の国が 7 カ国も存在する。現在のところ、西アフリカ諸国は類似した一次産品を世界市場に輸出し、工業製品を世界から輸入している。しかし、一次産品は価格の変動が激しく、価格高騰の際に一時的な収入増大をもたらすはするが、それが却って工業化や輸出財の多様化を阻むという現象をもたらしている（オランダ病）。経済発展のためには、より付加価値の高い輸出品を生産する、つまり工業化が必要とされるが、市場が小さければ、一つの産業を興すコストも高くならざるを得ない。仮に西アフリカ全体で経済通貨統合が形成されれば、例えば、ベナンで綿花を調達し、トーゴを経由して、ガーナで 1 次加工し、世界市場に輸出するようなことも容易となろう。域内でより効率的な分業ネットワークが構築されれば、現在のところコスト・質の面で全く競争力がないとされるアフリカの工業製品を世界市場に輸出できるようになるかもしれない。地域経済統合は、こうした国境を越える分業ネットワーク構築を容易にする可能性がある。4 つ目は、以上に述べた域内経済取引の活発化にあたっては、為替変動リスクといった取引費用の低下が望まれ、そういう意味で通貨統合が期待されている。しかしながら、他方で、マクロ経済指標があまりに異なる国同士の経済通貨統合は、さまざまな弊害をもたらすのも事実である。したがって、ECOWAS レベルで経済通貨統合を行うにあたっては、そのコスト・ベネフィットについても検証する必要がある。

ところで、世界経済の動きは明らかにマクロな現象である。こうしたマクロ経済現象は、様々な経済アクター（ミクロ）が気ままに行動した結果、総体として生み出された現象になる。つまり、これはミクロがマクロを創出することを意味する。他方、グローバリゼーションや地域経済統合といったマクロな経済現象が、個々人の経済活動に影響を与えているのも事実である。こちらはマクロがミクロに作用することになる。現在のところ、筆者自身、フィールドに長期滞在することが不可能という制約もあって、先に述べたように、自分自身の研究スタンスを「世界経済」というマクロに据えてはいるが、実は、グローバ

リゼーションや地域経済通貨統合というマクロ現象の下で、アフリカの人たちがどのような行動を選択しているのかというミクロな部分にもかなり関心を持っている。具体的には、アフリカの国境をまたがる経済圏でどのような取引が行われているのか？CFA圏と非CFA圏との間でどのような決済が行われているのか？域内の国境を越えて渡り歩く商人の存在については気づいていたが、彼らはどこからどこへ、どのような商売でどのくらいの利益があるのか？といった疑問が次々と浮かび上がってくる。また、グローバリゼーションとの関係では、近年、躍進めざましいアフリカ大陸でのアジア人ビジネスにも関心をもっている。

しかし、こうしたミクロな情報を具体的に集めようとする、これがかなり難しい。一般的には、社会調査法といったメソッドが確立されているが、彼らが日本人の私の研究に協力しなければならない義務はない。アンケート、インタビューとはいっても、アフリカにおいては、どうやって村やコミュニティに受け入れてもらえるか、さまざまなエージェントからいかに適切な回答を引き出すか、どう現地の人と付き合うか、どうやって信頼できる研究補助者を見つけるか、場合によっては、どうやって移動するか、どこに泊まるか、どうやって無事に生きて帰ってくるか、といった日本や先進国で確立された研究手法以外のノウハウも当然必要とされる。冒頭で、現実世界と理論の間の齟齬を考えることの意義を唱えてみたものの、実は、ミクロな経済アクターに関する情報を入手し、続いて、それを正しく認知することそのものがかなり困難な作業であることに気づかされている。

こうした理由もあって、長期間アフリカのコミュニティで過ごし、そこで信頼できるネットワークを構築してきた人類学の研究者とその研究手法に以前から関心を持ってきた。人類学の研究者からは、しばしば、日本からアポイントも無しにアフリカの村を訪問し、そこに長期間居候し、寝食を共にしながら研究を行っているにもかかわらず、どうも、明確な対価を支払っていなかったりするようなことを聞かされる。財やサービスには価格がついているところから話が始まる経済学にどっぷり浸かっている私には、理解不能な世界がどうもあるらしいということに気がつかされる。しかし、他方で、アフリカの村にも携帯電話網が敷かれ、世界の情報にアクセスできるようになった現在も、そうした牧歌的な世界が維持されているのかという点についても興味はつきない。また、今後、世界的な食料価格高騰が予測される中、最近、筆者はアフリカの農業や農作物加工に、他方、通貨統合のコスト・ベネフィット分析では、統計解析の手法を用いることに関心をもっており、文系以外の研究者と接点を持つことの意義も高いと感じている。また、現地で快適に過ごすための情報（滞在情報やインターネット、GPS、衛星電話利用といったノウハウ）なども共有できると非常に有意義である。

近年、要素還元主義的な研究の弊害が唱えられ、処々に学際的な研究が盛んに行われている。しかし、大きなテーマの下で単に異分野の研究者が集まっただけでは、グループが作られた時点で既に各々の役割が定められていることもあり、プロジェクトが大型であればある程、結局、それぞれの研究領域にはあまり深く立ち入ることなく終わりがちであるよ

うにも思う。つまり、各要素が単に集まっただけでは、有機的な連関は生まれないのである。かといって、一人の人間が最初から複数の分野や研究手法に精通しようとする、一つ一つの内容が浅くなり、結局、どの分野にも何らかの強みを持つことなく漠然とした内容を語るだけで終わることにもなりかねない。真の学際研究とは、最初に学際研究ありきではなく、各自の研究テーマを深めつつ、深める際に自分では解決できない疑問に直面したときに、その分野の専門家にコンタクトをとることから始まるように感じている。そういう意味で、Fieldnet の立ち上げは、今後の学際研究を推進していくような基盤になるのではないかと期待している。異分野の研究者に気軽に声をかけることが可能なゆるやかなネットワーク構築を発案した椎野若菜氏のアイデアと行動力そしてその協力者には心から賛辞を贈りたい。どうか、一時の情熱で終わることなく、細くても良いので、長く安定的にこのネットワークが継続されることを願ってやまない。